

高・大・一般 漢字（楷書B）

※楷書A、Bは段級をとわず両方出品も可。

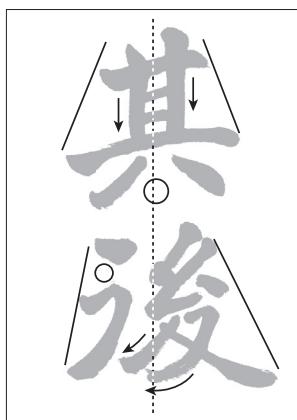
宮澤 鶯州
鄭羲下碑 ②



其後



藏鋒による起筆



鄭羲下碑 ②

<解説>

「鄭羲下碑」は、鄭道昭が父鄭羲の事績を顕彰するために書いた碑文で、自然の岸壁に刻されました。これを「摩崖」と言います。滑らかに磨いた石碑への揮毫とは異なり、岸壁の岩肌に文字を揮毫し刻ることは、至難の技であったと思われます。

鄭羲下碑の書体は線に円みや粘りがあり、刻された文字を下から眺めても読めるように字形の懐を広く大きく見せようとしているかのようです。けつして豪快で迫力のある古典ではあります。また、線に骨力を内在させたり、粘り強さや深い趣を学ぶには恰好の古典と言えます。

北魏楷書の代表的表現の一つである「円勢」を持つた「鄭羲下碑」を学んで、スケールの大さきを習得してください。

<学習上の留意点>

「其」：六画目横画の起筆は重厚に入り、送筆は伸びやかに長く引いて文字全体の規模を確保します。収筆は軽く止めますが、ことさら強く押さえて止める必要はありません。全体を通して、穂先は線の内部を通るように藏鋒で統一しましょう。また、下部の七画目は左払いのよう長く書いて上部を支えます。

「後」：ギョウニンベンは書写体で書きます。旁の下部の二つの左払いはそれぞれ収筆まで力をためて書きます。筆圧を緩めて軽くスーと払つて書かないように注意してください。

正月立ちはるの春来たばかくしこそ梅を、きつ、楽しさ竟へめ



半切に和歌を書く

〈釈文〉 正月立ち 春の春来たば かくしこそ 梅を、きつ、 楽しき竟へめ
 〈出典〉 万葉集 卷五 大式紀卿 梅花の歌

歌意

正月になつて春が来たら、毎年このように梅の花を迎えて楽しさの限りを尽そう。

揮毫上の注意

この歌は、元号「令和」の出典となつた「梅花の歌三十二首」の劈頭の一曲で、皆さん一度は書いているかもしません。半切

二行書き、変体仮名を使わず調和体風に書きました。行頭小さめに、書き出しの三文字は漢字

春來也



歌の主題、

「宜しく園梅を賦して、聊

なので注意を。この行の中心は中央の「春の來た」です。ここは、やや大きく墨量も多くして

力強く書いてください。作品に安定感を与えます。一行目の下半は文字をやや小さく書き、二行目下方と呼応し行の中心を次第に右へ移して、読み易いように字間の余白を取ります。二行目



行頭は、この「招きつゝ」は、放ち書きしながら意連で運筆します。文字は左右に傾きつつ構成していますが、行の中心は貫通するように中心を通します。「樂しき竟へめ」は落款の位置を考慮して構成して、文字は傾けずに中心を次第に右に移します。「竟へめ」は、「終へめ」と書いた本もありますが、「竟宴」の意味から判断しました。今回漢字を多用しましたが、歌意をわかり易く示し、力強く表現することに努めました。